

の附属地図に充当された。備置場所は官制の変更でよく変わったが、昭和25年に税務署から法務局登記所に移管されたのは周知の通りである。

ここまででかなりの枚数を使ってしまった。あとX章とXI章を簡単に紹介するにとどめたい。X章は第二次大戦後、制度の変革に伴って作成された新定の地籍図類と、旧地籍図類が依然として使用されている経緯などについて述べた章である。新定の地籍図類というのは、国土調査に基づく法定地籍図や、土地改良法・土地区画整理法・新住宅市街地開発法などによって作製され所在図(確定図)、あるいは不動産登記法の第17条が登記所に備えることを規定している、いわゆる17条地図などがそれである。

国土調査法に基づく地籍図は、未完成のところが多い。所在図や、17条地図はごくわずかしかできていない。従って、旧土地台帳附属地図が公図として、登記所や市役所・町村役場においてなお機能を発揮しているのである。また、新しい地籍図の作成に当たっても、旧地籍図はその基礎資料として重要な役割を果たしている。本書では、こうした事情を資料をあげて述べているので、戦後の状況をよく理解することができる。

XI章は明治政府による地籍調査と、上述4種の地籍図作成の経緯などを要約したものである。各種の地籍図について要領よくまとめられているので、大著の要旨を理解することができる。

本書は大部であることもあって、誤植の類も何か所か目についた。評者が書いたものに誤植が多いこともあって、他人の著書の誤植類を拾うのは気が進まないが、本書がこれからの地籍図研究の基本図書であることから、すでにあげた以外のものを若干記しておく。重版の折には訂正して頂きたい。まず126頁の1行目の引用文、205頁の量地縮図解からの引用文に連続した脱落がみられる。138頁の注47)、48)および同51)付近の注記には混乱がある。また、地租改正事務局議定に含まれる地租改正条例細目などが10カ所ほどに現われるが、その公布日が明治8年の7月8日に訂正されていない箇所がみられる。それに本文中に図番号、注番号あるいは県名に誤りとみられるものが若干ある。付Iは最初にもふれたように便利な資料であるが、敦賀県の部分は少し訂正を要するに思われる。

以上、一部省略したところもあるが、本書を概略紹介した。評者自身はそれによって多くのことを学

ぶことができた。同時に著者が本書に注がれた努力に頭が下る思いがした。著者は「丹念な密度の濃い調査を全国にわたって行なうことは個人の力では限界がある」といわれているが、その限度を越える業績を大著に著わされた。本書の随所にみられる多くの中央政府や府県、町村資料は、並大抵の努力では集まらなかったであろうと思う。この膨大な資料の収集と、その分析に精魂を傾けられた著者に改めて敬意を表する次第である。

本書では明治期作成の4種の地籍図のすべてが詳しく論じられている。それに戦後の新定地籍図についても言及されているから、本書はわが国の現段階における地籍図研究の決定版といえる。あえて現段階におけるとしたのは、著者が「はじめに」において述べられたように、地籍図研究にはなお多くの課題が残っているからである。著者の地籍図研究が愈々進展されるよう祈念すると共に、一人でも多くの人々が本書に触発され、地籍図の研究やその利用を深められるよう心から希望したい。

(桑原公徳)

矢守一彦 著：

『城下町のかたち』

筑摩書房 1988年3月

B6判 277ページ 2,200円

題して「城下町のかたち」という。都市プランの面を重点に城下町を論じたものであるが、都市プランでは一般読者になじみが薄いというのでこの書名にしたという。

矢守氏の城下町プラン研究の成果には大きな柱が2本ある。戦国期型→総郭型→内町外町型→町屋郭外型→開放型の変容系列はその一つである。「近世城下町プランの基調」の章で概説され、「城下町プランの地域別考察」の章で各論的に叙述される際の一視角になっているが、むしろ控えめな記述になっている。この考えは早い時期に発表されたもので、既往の氏の著書で論ぜられ、十分に学界に定着しているとの判断によるものであろう。

いま一つの柱が「タテマチ」「ヨコマチ」論である。大手通に平行する方向を軸とするものをタテマチ、大手通に直交する方向を軸とするものをヨコマチとして、この見地から城下町プランを2大別して考えようとするもので、近年、矢守氏と足利健亮氏が意欲的に組みくんでこられたところである。本書

でもこの方面の検討に重点がおかれている。第1部の第2章「城と城下」の章に「タテマチとヨコマチ」の一項を設け、また第3章「町割りにおける〈秀吉モデル〉」において、更に第2部の第1章「城下町プランの地域別考察」において、理論的な問題提起と、個別城下町についての各論的な叙述が展開される。本書の中でもっとも力のかもった部分であろう。申し遅れたが、本書は総論的な第1部と各論的な第2部からなり、第1部が4章104ページ、第2部が3章163ページ、それに「あとがき」「図版一覧」、都市名索引が附されている。

矢守・足利両氏のタテマチ・ヨコマチ論はどちらが先に提唱されたか評者は知らない。両氏の間に見解の相違点があり、論争めいたものも行われている。評者の見るところ、両氏の意見は大筋において一致し、細部という複雑なプランをもつ都市の扱い方において説が分かれるようである。当事者である矢守氏が「むぎになって論じ立てようというような気は当方にはない」（81ページ）とされているくらいだから、論点を紹介したり、いわんや一方に軍配をあげるようなことは差し控えたい。ちなみにこの点についての両氏の意見は、矢守氏においては本部の第1部第3章「町割りにおける〈秀吉モデル〉」に、足利氏においては同氏著『中近世都市の歴史地理』（地人書房、1984）に収められている。

全国にわたって個別城下町の各論的叙述に力を入れられたのは本書の特色というべく、取り上げられた城下町の類は「城下町プランの地域別考察」の章で東北13、関東14、近畿6、中国・四国17、九州13を数える。これらはゴチックで見出しをつけられたもののみを数えたもので、別の形で言及されているものもあるし、他の章でも多くの城下町が取り上げられている。

これら各論的叙述について、我々は著者の目に見えぬ努力に思いを寄せる必要がある。著者はもちろん全国区の立場である。しかし読者の中には、現地に住み、郷土である城下町の研究に生涯を捧げている人もいるはずである。このような人の批判に耐え得るためには、形にあらわれたものとしてはタテ・ヨコの別と数行の説明にすぎなくとも、そこに到達するまでには古地図等を主として慎重な検討がなされていると思われる。矢守氏よりは評者にとってホームグラウンドともいうべき関東の場合について

考えてみたが、ほぼ氏の所説を妥当なものとして賛意を表したい。川越については大手道にあたる本町・高沢町に注目してタテマチ型とされるが、評者は江戸街道に沿う松江町や、蔵造りの商家が卓越する喜多町・南町を重視してヨコマチ型と考えている。また氏は取り上げられていない関宿については大手門の移転により、当初タテマチ型だったものがヨコマチ型にか変わったという学生の報告があるので、この際紹介しておく（毛受由美、駒沢大学地理学科卒業論、1988、未発表）。

「城下町プランの地域別考察」の章では中部地方については扱われていず、別に「地域別都市史の試み—中部地方」の章がある。ここでは古代から近世までの各種都市が手際よく概説されており有意義ではあるが、章全体のバランスとの関係からか近世城下町の項は2ページのみ、タテマチ・ヨコマチの検討は含まれていない。この章で代用せず、中部地方についても他地方なみの叙述をして欲しかったと思うのは評者のみではあるまい。

評者は矢守・足利両氏のタテマチ・ヨコマチ論に興味を覚え啓発される所が多かった。両氏とも対象を城下町に限定されているが、城を寺社・県庁・大学・駅等におきかえることによって他の種類、また他の時代の都市についても同様の検討が可能であると思う。あるいはこれは評者ら後進の仕事であるかもしれない。駅前集落についてこのような視点から検討したことがある（駒沢大学文学部研究紀要14、1986）。広義の城下町というべき陣屋町についても両氏とも対象外にされているが、規模が小さいだけにより典型的な形を示すものが多く、タテマチ型からヨコマチ型への推移も見られるようである。

他のテーマとして「明治以降における変容」は、藩政時代に城下町のどのような部分だった所が、明治以降どのように推移して、現在どうなっているかを明らかにしたものであり、地理学者の城下町研究ならではの課題といえる。

「江戸の空間構造」の章では、多数の文献を駆使して手際よく問題点が整理されている。

本書は書名にも示されるように啓蒙書体的な体裁をとってはいるが、著者の近年の成果をまとめた専門書の色が強い。城下町研究者にとって必読の書といえよう。

（中島義一）